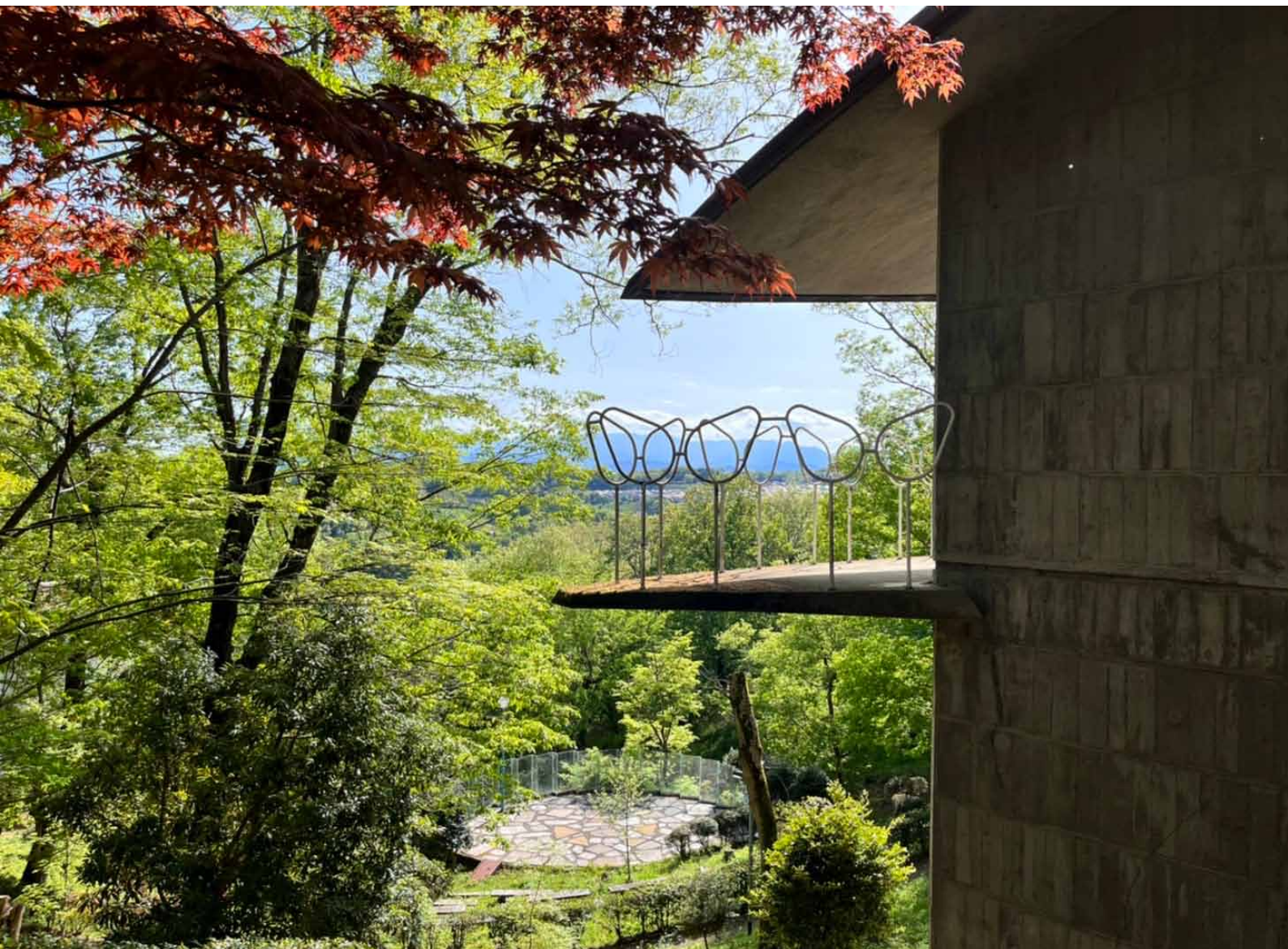




築理会 会報

2022 Autumn vol.70

東京理科大学工学部建築学科校友会



「秋容」：塩島 健太（建築学科4年 写真部）

第17回 東京理科大学 ホームカミングデー ～未来につなげよう、ホームカミングデー～ オンライン開催

理窓会ホームページ特設サイトに築理会参加
10月30日（日）9：00公開

大阪で会いましょう。

大阪での理大同窓会「建築・土木の集い」
11月1日（火）18：30 シティプラザ大阪で開催決定
「建築・土木の集い」として築理会、野田建築会、他学科出身の建築・土木界の方も一緒です。当日大阪にいらっしゃれば是非ご参加ください。（佐野吉彦築理会会長より）

参加申し込み、お問合せはこちらから
<https://chikurikai.org/contact.html>

CONTENTS

特集「カーテンウォールから木材の世界へ」	2P
同窓生の今を考える「働き方をシフト」	4P
インフォメーション	8P

東京理科大学ホームカミングデー 2022
大宮喜文氏ならびに寺本健一氏受賞記念講演会
学生と卒業生交流会イベント「先輩と語る2022」、
新任退任教員、表紙写真紹介、新年会

築理会の最新情報を、HP、メルマガ、Facebookで配信しています。
築理会活動へのご意見・ご要望、会員の情報がありましたらお寄せください。
chikurikai@gmail.com

“カーテンウォールから木材の世界へ”

編集委員：本日は、2011年真鍋研究室卒、2013年同研究室院卒の渡邊杏奈さんのお話をお聞きしたいと思います。渡邊さんは大学院卒業後金属建具メーカーに就職され、結婚退職を経て、現在は岐阜県にある木材関連会社に勤めておられます。メーカーから林業全般に関連したクリエイターへと大きく職業を転換され、未知の分野で活躍する姿を皆様にご紹介したいと思います。渡邊さん、よろしくお願ひします。



渡邊杏奈
(2013年真鍋院卒)

渡邊：私は、大学院時代からインターン生としてYKK APで設計の手伝いをしていました。将来は超高層ビルの外装ACWの設計がしたいと思い、あまり進路を迷うこともなく、そのまま就職したという具合です。CWメーカーでの仕事と生活は大変でした。工場で1年間製造を経験した後、本社設計部門に移りました。客先は日本人ですが、生産設計作図はベトナムで行い部材製作は中国という具合です。若いうちから海外とのやり取りも多く、割と世の中を幅広く見てきた気がします。ACWというオーダーメイドの製作物なので、発注者である総合建設会社との打合せを中心に、非常に手間と時間のかかる作業でした。技術的内容も専門性が求められ、シビアな図面精度を要求されます。一方では、やっていることが外装専門職種なので、建物の他の部分のことがわかりません。もっと建築全体、あるいは街づくりのようなことに興味が移ってきました。この先の人生を考えたとき、メーカーでの仕事を離れることも考えるようになりました。

そのような時期にちょうど結婚することが決まり、先のことを真剣に考え直す機会となりました。どっぷりと浸かった建築業界から知らない世界に移りたい、できれば建築でなく違う分野はないものかなどと考えていました。結婚を理由にメーカーを退職した後、キャリアコンサルタントという国家資格を取りました。当時の経歴(前職YKK AP+2級建築士)では次も建築関係しか展望が開けなさそうでしたので、自分の経歴資格に違ったカラーを付けたかったのです。

夫の転勤のため名古屋で生活することになり、偶発的な出会いの中で「飛騨五木」という会社のイベントに参加しました。決して大きな会社ではありませんが、とても変わった会社なのです。地場の工務店の場合、材木を調達し建物を建てるのが中心となります。それに対し飛騨五木は、木を育てるところから始まり、建物を建てた後その運営まで行うという特徴があります。つまり林業・建設業・イベント業を一気通貫でやって行こう、という戦略です。一部でなく全体、建築にこだわらず別な世界が見えるというところが、目指しているものに、今の自分の感性にフィットする気がしました。結果として、「飛騨五木」の人事部に入社することになりました。

ここで少し「飛騨五木」について説明したいと思います。

工務店というのは、ご存じのように、建て主がいないと仕事になりません。木造建物の建築は一番やりやすく、経営の中心ですが、徐々に人口が減っていく地方においては、自ら仕事を作っていく必要があります。この会社は元々山を所有しており、伐採から製材・乾燥・加工という林業も大きな事業の柱でした。人口が減少する地方において、単なる工務店から特色のある事業展開を目指そうとしています。川上から川下まで、さらにはその先へと目指しています。林業と建設業をトータルでとらえ、新たな企画・提案を行い、それを実現しています。そのような会社の中で、私は人事部として入社したのに、いつのまにか特殊な木造建築のプロジェクトを受け持つことになりました。

一般建築以外の木造製作とはどのようなものか、なかなかイメージがつかないと思いますので、一例をお話してみます。都市公園法の中にPARK-PFI制度というものがあります。これは、公園に施設を設置・運営する民間事業者を公募する制度でして、公園管理者の財政負担を軽減しつつ、公園の質や利便性を高めるという狙いがあるのです。私が担当したのは、岐阜県にある大きな公園の中に、地域産材で巨大な子供の遊び場を作るというものでした。いろいろなアプローチがある中で、岐阜県というエリアの特色を生かすために、得意とする林業・木育というコンセプトを前面に出した案を作りました。玩具メーカーのように様々な遊具を並べるのではなく、できる限り要素を少なくして、野山を走りまわり崖を転がり落ちるような施設を計画したのです。好評を得て採択につながり、後にウッドデザイン賞林野庁長官賞もいただきました。現在その公園施設の運営も当社で行っています。このような最初の企画と最後の運営の部分を、私が担当しています。



▲岐阜県にある「KAKAMIGAHARA PARK BRIDGE」

編集委員：ご説明ありがとうございます。なかなか思い切った転職で、驚きます。少し詳しくお聞きしたいと思います。アルミ建材とは違った方向を目指していたとのことでしたが、なぜ飛騨五木だったのか、なぜ林業だったのでしょうか。なかなか今の時流に乗っていますね。

渡邊：無機質で巨大な建物を作り続けることに疑問を感じ、もっと社会的に役立つことはないものかと考えている状況でした。そんな時、この会社が主催するイベント参加へのアンケートがありそれを出したところ、会社側から話が来たという具合です。とくに木造をやりたいとか、先々のことを考えてここにしようということではなく、興味を引かれた中の一つでした。そこで会話をしているうちにどんどん話が進み、気が付いたらそこで働い

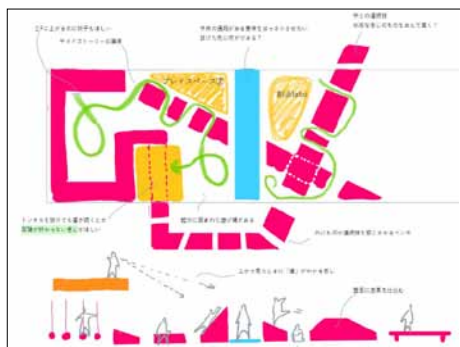
ていたという感じです。今考えると、YKK APでの仕事や生活と対極にあることが、魅力を感じた大きな理由だったと思います。野心的にキャリアアップを目指してというようなことでは全くなかった分、視野・選択の幅が広がったということがあったかもしれません。

編集委員：なるほど、とても自然な流れなのですね。次に全く知らない新しい世界に飛び込んだわけですが、不安・心配はないのでしょうか。

渡邊：都会にある大手サッシメーカーと地方の工務店では、何もかもが違います。来年の事業計画などなく何事も試行錯誤しながら、ひとつひとつ手作りで積み上げていく感じです。もちろん社員もわずかで、特に今の部門はほぼ女性で構成されています。ギャップは当然あります。今やろうとしていることが社会でもまだ認知度が少なく、またさまざまな業種・階層の人々と会話を重ねながらようやく出来上がるので、今まで以上にコミュニケーションを大切にしています。前職での経験、とくに作業の段取りという部分が、いろいろな場面で活かされていると感じています。また、難しいと思っていたことが、やってみると案外できるものだなというのが実感です。

編集委員：そこが本当に素晴らしいところですね。聞いていてこちらがわくわくしてきます。また、完全テレワークということもうかがいました。現在は岐阜県でのプロジェクトを東京でコントロールしている、ということがなかなか想像できないのです。現地で集まり、実物を見ながらデテールを作り上げる、運営手法を修正するということが出来るとは思いませんか。

渡邊：現地を訪れるのはおおよそ2回/月くらいです。企画から設計の段階では、私の方でコンセプトメイクを東京で行い現地に送る、現地で設計者がデテールを図面化する。その図面の中で一つ一つ互いに確認・検討を重ね、完成させるのです。前職では何事も図面を通してやり取りをしていました。それも海外の人たちとです。物理的な距離は気になりません。出来上がって運営時には、利用者からの要望など様々な変更・修正を要求されるわけですが、互いが遠く離れている分、現地スタッフも私も冷静に話し合うことが出来ます。同じ雰囲気の中で流れに乗り結論を出すのではなく、離れたところで報告を受け整理した中で第三者的になり、良い判断・指示ができる気がします。



▲初期段階のコンセプトメイキング図案

編集委員：なるほどそのとおりのかもしれません。前職での苦労が実を結んでいる形ですね。きっと、どのような職業

であっても、多かれ少なかれ社会に共通するスキルはあるということでしょう。それを生かすことが大切ですね。今度は会社の事業性について質問です。今やっていることが、新しい取り組みでありクリエイティブだということは感じましたが、事業としてなり立つもののでしょうか。

渡邊：運営時の利用者の入場料でペイすることが前提です。ご存じの方は少ないと思いますが、都道府県には「森林環境税」というものがあります。森林保護や木材普及活動に使われます。「木育」という言葉があるくらいで、行政は林業に関する様々な企画・提案を求めているのです。前述のように飛騨五木は、企画から木材生産・建築・運営までをすべてやり遂げるということを売りにしています。木材は山にある時は数百円ですが、出来上がった建築での価値は数万円と桁が大きく上がります。当社は一気通貫で行うことでその間のマージンの削減が出来るので、経営として成り立つというわけです。そのため、社内の生産部門からも具体的な要望が来ます。例えば、今年の年間計画生産量と使用希望m3であったり、特定樹種の利用、端材の有効活用のアイデアを求められたりと多岐にわたります。林業から運営までやる会社だからこそできる「木育」もあると思っていて、木材や自然環境に関する子供向けワークショップを年間100件以上開催しています。そういったイベントの企画づくりから、オペレーションを考えるのも私の仕事となります。



▲施設で行っている木育ワークショップ(端材を活用した工作)

編集委員：なかなかユニークなところに活躍の場を見つけましたね。政府も日本の労働市場にますます流動性を求めるようになり、転職という言葉も日常のこととなりつつあります。当時のACWメーカーでのワークライフバランスには、問題あることも聞きました。どのような職種でも同じようなことはありますし、若い方に限らず中高年代の方々も多く転職を検討する時代です。しかしながら、この一步を踏み出すには、躊躇する深い谷を感じている人がほとんどです。その中で、興味と希望に向かってひらりと向こう側に飛び移った渡邊さんの生き方に、勇気をもらう人が多くいるような気がしてなりません。今後の益々の活躍を祈念しております。本日はありがとうございました。(編集委員浦山記)

同窓生の「今」を考える

「働き方をシフト」

今回は「働き方をシフト」をテーマとして、大学時代の思い出、取り組まれてきたお仕事、そして今後の活動についてご執筆いただきました。

Profile

- ①出身地
- ②好きな建物
- ③今まで仕事で行ってきたこと
- ④今後取り組みたいこと

疎開がその後、松本都市計画の卒論へ



洞澤 正敏

1968年卒

碓井憲一研究室（都市計画）
株式会社シグマエンジニアリング

profile

- ① 神奈川県横浜市
- ② スイスの首都ベルンにあるアトリエ5設計のコーポラティブハウス、ハーレンジードルング*グーグルに詳しくあり。28才のとき、ヨーロッパに6週間、出張し、雑誌都市住宅編集長の紹介でアトリエ5の日本人建築家訪問、ハーレンジードルングを案内していただく。
- ③ a 過疎対策と農村整備計画、b ダム対策としての周辺整備計画（地元の町かダム建設の事業主体に出す要望）、c ゴルフ場建設の地元町に与える影響、d 内陸工業団地エネルギー需給実態調査、e 民間宅地開発整備水準に関する調査、f 民間宅地開発と社会資本投資、g 全国植樹祭熊本大会会場計画、h 自動車部品会社、本社 & 総合開発センター、USAインディアナポリス工場、各地保養所、i 留学生宿舍、j 老舗牛鍋や別館ステーキハウス計画、k 老人病院、精神病院、救急指定有床診療所、l 有料老人ホーム、老人デイサービス、障害者グループホーム、m 再生可能エネルギー、ソーラーシェアリング、バイオマス発電所、風力発電所、n OMソーラーハウス
- ④ ネパールの全寮制小中学校及び病院計画、モンテネグロの病院計画と水産加工施設

長野県松本市に疎開した私は、生後4ヵ月で横浜大空襲にあい、自宅を焼失したが、家族は全員無事だった。

高3の時東京理科大41Aの若林紘一先輩（同じ高校出身）に出会い、大学を紹介された。

無事入学出来、必要と感じた美術の豊島先生の講座を受講し、更に横浜の画家松田ヨシオ先生の教室に毎週2回7年かよった。

卒業論文は「松本都市計画」卒業設計は「農村住区計画」碓井憲一教授にお願いし研究室に入る事ができた。

会社の進路は若林先輩に相談し、会社見学をさせていただいた。その帰りに会社の方と麻雀し役満をしまい、先輩に叱られてしまった。

この時の三井建設本店設計部は約130名、若手主体のとても活気に満ち、是非入社したく受験勉強をした。

入社出来配属されると、若手諸先輩は、日本初の超高層霞が関ビルの設計チームに出向中、週一会社に戻ったときは先輩を囲み、又現場見学にて詳しく説明を聞き大いに盛り上がった。

その後完成した世界貿易センタービルが現在解体中である。

同じころ大阪万博の三井グループ館に責任者として出向していた先輩を囲むと「日本の設計界での三井グループの立ち位置を常に心がけ設計に臨むように」と教えられ、勇気づけられた。

入社時から高度成長する会社は若手育成に力を注ぐ時期でもあった。二年上の若林先輩や、一年上の若手先輩たちが我々新入社員を迎えるにあたり、準備体制を整えてくれていた。毎週雑誌新建築の月評などを参考に読書会（見る、語る、書く）を開いてくれた。会社も月一回、早稲田大学の吉坂隆正教授（コルビジェの弟子）を招き吉坂ゼミが社内でおこなわれた。教授の資料を輪読し解説、そして「文字から形への変換を創出」するトレーニングは新鮮で、興味深く毎月のゼミが楽しみであった。

この成果がチームワークとなり、皆でコンペに挑戦し、3年間で二回最優秀賞を受賞したことに繋がり、おおいに励みとなったが、会社に泊まる習慣が付き殆ど帰宅しなかった。

その後、運輸大臣秘書官や43A早川道敏君や先輩後輩たちとコンサルタント事務所を設立し、500haから78haの大規模開発や、第三次全国総合開発計画の地方生活圈計画調査（目標年次25年先）、そして伝統的文化都市[津和野、萩]の整備計画調査を担当した。特に将来の人口推計とプロジェクトの時系列計画を中心とした内容である。

やがて卒業して10年後、高校の同級生が、医師となり病院の設計依頼を受け、これを契機として、建築設計に戻る為独立し、ヒルサイドテラスの仲間の事務所に仕事を持ち込み居候を始め、病院設計完了とともに、横浜にて開業した。事務所開業にあたり44Aの前田矩男君には大変お世話になった。

43A福田義克君、大岩昭之君には大学との繋がりが必要として、大変お世話になった。その後病院の設計が25年間続き、今は再生可能エネルギーに力を注いでいる。



ひきこもりと育てた沖縄コーヒーを届けたい



近藤 正隆
1968年卒
柘植研究室
特定非営利活動法人
ウヤギー沖縄

profile

- ① 静岡県
- ② 名護市役所
- ③ 特別支援学校等の公共建築の意匠設計

私は、農業で不登校やひきこもりの人たちの支援を目指している、NPO法人ウヤギー沖縄理事長の近藤正隆です。コーヒー園の経営者は、名護市中山のナシロコーヒー園の名城政雄氏です。以下が一緒に夢を実現させる方を求める趣旨です。

私はコーヒーが好きです。それ以上に沖縄が大好きです。今沖縄はコロナ禍で大変厳しい状態です。そこで2人で何か役立ちたいと考え、78歳と74歳にして最初で最後のクラウドファンディングに挑戦しています。

沖縄ではコーヒー栽培ができます。しかもこれが実に美味しい。東京での5回の試飲会は好評。収穫祭ツアーも大評判。しかし沖縄コーヒーは生産量が限られ、沖縄の特定の所でしか飲めません。沖縄は台風が多く、木を守るためのハウスが必要です。コーヒー農家は小規模で収穫からすべて手作業。それ故効率も収益も悪く販路も不十分なため、参入する農家も増えないというのが課題です。

では何故生きづらさを抱えている人がコーヒー栽培なのか。彼らは概して他人とコミュニケーションを取るのが苦手です。長時間労働は無理な人もいます。しかし彼らは一人黙々と作業するのは得意です。そこで彼らの長所を生かし短所を補う仕事となるのがコーヒーです。コーヒー栽培は軽作業が多く、最低限のコミュニケーションで十分です。沖縄コーヒーは無農業で希少価値もあり、ブランド品として十分な収入も見込まれます。これが彼らとコーヒーを結びつけた所以です。

沖縄では既に100年前から栽培されていたことが分かっていますが、残念ながら沖縄の人でも沖縄コーヒーの存在を知らない人もおります。そこで彼らの力を借りて、沖縄コーヒーのブランド化を進めたいのです。コーヒーリーフティーという新商品もあります。これはコーヒーの葉のお茶で、ポリフェノールが多く含まれるという成分分析もあります。

本事業の寄付金使用目的は、第一にどこの支援団体にも結びついていない、ひきこもりの方々と知り合うための費用。第二に彼らがコーヒー園の管理運営を学びながら、栽培、収穫、精製、販売に従事するアルバ

イト費用。彼らの仕事により、1年間でコーヒー生産高も彼らの収入も倍増します。

7月4日に私どもはクラファンを公開しました。これが78歳と74歳の挑戦です。

同窓会の皆様にも、この夢のある香り高いプロジェクトに参加してほしいのです。



トンネル内火災列車走行試験の思い出



近藤 友一
1974年卒
浜田研究室
近藤建設工業株式会社

profile

- ① 静岡県
- ② ソーク生物学研究所 (ルイス・カーン)
- ③ 小田急建設時代 商業ビル・ホテルの設計
現在 住宅設計・ビジネスホテル・工場等の設計
(なんでも)
- ④ 世界の建築史の勉強と旅行

私の生まれは昭和25年8月。「団塊世代」は昭和22年から24年と言われていますから、私は「団塊の世代のシッポ」と思っています。このシッポの世代も人数は大変多く、中学校では50人学級10クラス。卒業するまで名前の知らない同級生が数多くいました。そんな時代に生まれ、競争社会の中での大学受験は東大紛争で東大の入試は中止。まあ東大を狙っていたわけではありませんが、予定通りの浪人生活を始めました。

水道橋にある予備校に通っていましたが、水道橋駅前に日大があり、いつも機動隊と学生との紛争を横目で見ながらの予備校通い。大学紛争が日常の中になりました。

そして何とか理科大入学。しかし紛争のあおりで2学期から大学はロックアウト。授業は無くレポート提出という大学生活のスタートでした。

4年生になると研究室に所属します。私は浜田研究室を選択しました。1972年、大学3年生の時の千日デパート火災(死者118人)、1973年、太陽デパート火災(死者103人)があり今までの火災史でも例を見ないものでした。まだ全国の大学の建築学科で防災工学の研究室は珍しい存在でした。

4年生の時は都市防災の研究、大学院では建築防災を選択しました。浜田先生は当時日本の防災研究者の

大家。大学院の時には先生を委員長とする大きな火災実験に立ちあう貴重な経験を幾つかしました。その一つがトンネル内火災列車走行試験です。



第1回トンネル内火災
列車走行試験



第2回トンネル内火災
列車走行試験

(辻本誠先生著「火災の化学」より写真を引用させていただきました。撮影は私です。)

1972年、北陸本線北陸トンネルで列車火災が発生し死者30人、負傷者714人という大災害がおきました。運転規定ではトンネル内でも列車を止め消火にあたるということでしたが、暗闇と煙で大災害が起きてしまったのです。この規定を検証するために実際に車両を燃やしてトンネルをくぐらせるという実験が東北の宮古線で行われました。2回の実験でデータの検証の結果、トンネル内での列車火災では停止せずにトンネルの外まで走行することになりました。

線路の法面から実験の様子を写真に撮るときに、私が法面を落ちないように浜田先生が後ろから引っ張ってくれていました。先生は70歳を過ぎていました。私にすれば良いおじいちゃんだなーという感じです。実験を終了し研究室に戻ると「近藤君、火災車両の後ろの車両のCO濃度を計算で推測してごらん。」と言われ、また「ベルヌーイの定理を使うといいんじゃない。」というのですがどうして良いのかチンプンカンプン。物理のことなんてとっくに忘れていますからあわてて高校の教科書を取り出し再勉強。何とか提出したものの全く自信なし。でも先生は目を細め大変喜んでいたので懐かしく覚えています。

あれから50年、今でも結果が正しいのかわかりません。

建築人生45年を振り返って



田村 幸彦
1976年卒
鈴木研究室
株式会社田村設計室

profile

- ① 神奈川県
- ② 港南つくしんぼ保育園 (自社設計)
- ③ 建築のできる大部分のこと
- ④ 建築の世界でまだやり足りないこと

【学生時代から就職まで】

我々の時代、建築学科は工学部の中でも超花形の存

在、それも理科大ともなれば超難関、その突破は、昔から絵や地図を描くことが好きで中高校生の頃から建築家を夢見ていた私にとっての第一歩であった。一般教養の授業はさぼり気味であったが、設計製図の課題には熱が入った。パソコンという言葉すら無かった時代、手書きの世界はT定規から最新型ドラフターへと進化していった。烏口やロットリングというインキングのための製図道具を駆使して、ポール・ルドルフの断面パースを何晩も徹夜して仕上げたのも今や懐かしい思い出である。色々な設計事務所をアルバイトとして渡り歩きながら徐々に実務に首を突っ込み始めた。オイルショックの影響で求人皆無となった中、東京の超有名事務所からのオファーがあった。それを断った馬鹿者であった。横浜生まれは横浜で建物を造りたかった。

【実務始動の若年期】

横浜で最先端を走っていた松本陽一設計事務所働くことになった。入社して間もなく市内学校法人が経営する幼稚園の設計担当を任された。右も左もわからない新人が気合で乗り切るしかなかった。その後も横須賀市本庁舎、市内スポーツセンター、地区センターなど大型物件に携わり、昼夜問わず働いた。休日に必ず駅で買っていった崎陽軒のシウマイ弁当を見るのも嫌になるほど食べ飽きた。

【バブル期】

一人で8物件担当した時期もあった。官庁物件のほか自動車ショールーム、ガソリンスタンドなども手掛けた。今思えばいわゆるブラックである。多種多彩な案件と関わることができオールマイティーな建築家として成長して行った。

【転換期】

自分の名前前で仕事がしたいという欲が出てきたと同時に、友人が家の設計をして欲しいとの依頼が重なった。勤め先の仕事が終わって帰宅して一杯やった後、自宅の製図板の前に座って、気が付くと朝だったという生活が続いた。寝不足状態が続いた。

地球市民神奈川プラザというコンペで獲得した大型物件の建設途中ではあったが、あとは後輩に任せて、松本所長に封筒を差し出した。後継ぎという座を捨てた。



港南つくしんぼ保育園

【熟年期】

先のこととも考えない独立の出だしは順調であった。念願の外車のオープンカーも手に入れた。次の仕事のこととも考えずに独立後初めての案件にのめり込んだ。大成功の建物が完成した・・・が、次の仕事が続かなかった。借金に駆けずり回った。民間の仕事は待っているだけでは来ない。官庁への入札参加資格登録をした。神奈川県はほとんど入札だが、横浜市はプロポーザル形式、コンペで磨いた腕を徐々に発揮、今では順調に受注を続け、スタッフにも恵まれ、この投稿をきっかけに数えた約140件の実績をどこまで増やせるか？死ぬまで馬鹿者を続けていきたい、そして建築が大好きな大馬鹿者であり続けたい。

世の中へ、お客様へ、感動を届けたい！



清水 裕久
2004年卒
大月研究室
(株)コスモスイニシア
profile

- ① 愛媛県松山市
- ② 落水荘
- ③ 不動産開発、新規事業企画・推進
(例：教育施設等の公共建築の意匠設計、現場監理)
- ④ 感動の輪を広げること！
(例：古民家のリノベーションをして、住みたい)

大学を卒業後、不動産デベロッパーである(株)コスモスイニシア(旧リクルートコスモス)に入社しました。

元々、建築領域にこだわっていたわけではないですが、自分の考えたことやオリジナリティなことを生み出したいと思い、発注者サイドである不動産会社を中心にうけ、最終的にはリクルートの自由闊達な文化で、若いうちから裁量権のありそうな今の会社を選択しました。

入社当時から分譲マンションの設計企画・監理、仕様書策定からゼネコンへの現場出向も含めてさまざま経験し、3年目にもなると早くも自分の物件を持たせ

ていただきました。一生の買い物でもある数千万、数億もするマンションを、自分が考えた“間取り”、自分が決めた“デザイン”などが形になるのは、正直ドキドキもありながら、とても刺激的な仕事でした。設計事務所、ゼネコン、メーカーなどの皆さまと一緒に一つのモノをつくりあげる面白さ、醍醐味を感じ、またお客様から感謝される喜びを今でも覚えています。時に自分が担当したマンションの前を通るとお客様の暮らしている姿に嬉しくなり、また当時のことも思い出し、感慨深いものがあります。やはり地図に残る仕事は素敵ですね。

当時の日々は充実していたのですが、もっともっと感動を届けたい、もっと社会にインパクトのあることをしたいと思い、建築だけの領域に収まらず、世の中に価値のあるビジネスをつくってみたいと思うようになり、現部署でもある新規事業開発に手をあげて異動させてもらいました。

そして、これまでいくつかの新規事業を創発してきました。一棟社宅を分譲マンションにリノベーションする再生事業、ミレニアル世代向けシェアレジデンス開発・運営事業、職住近接シェアオフィスの開発・運営事業、公的不動産を活用したグランピング運営事業など。事業開発というと煌びやかなイメージもありますが、むしろ泥臭く苦しいことがほとんどです。1勝9敗と言われる新規事業、お蔵入りした企画や撤退した事業は数えきれません笑。それでも何度も企画を練り直し、仲間と四苦八苦しながらお客様へ提供できたときの感動や達成感はひとしおです。

これからも「世の中の変化を新たな不動産価値へ」をコンセプトに新たな事業開発をしていこうと思っています。人口減少時代でのインバウンドの増加、シニア世代の増加、働き方改革、価値感の多様化など世の中の変化をキャッチアップし、単に不動産としてのハコをつくるだけではなく、どう活かすか、どう利用するかを追求し、少しでも社会にお客様に貢献していきたいと思っています。

鋼骨杭トッパ・プレートジョイント工法 エクス・ティーパー

ECS-TP

鉄骨構造物に革命を。
杭と柱の一体化。

株式会社 三 誠
SANSEI INC.

Tel: 03-3511-0211 Fax: 03-3551-0217 Mail: info@sansei-inc.co.jp
〒104-0033 東京都中央区新川 1-8-8 アクロス新川ビル 9F

北海道営業所 / 東北営業所 / 新潟営業所 / 北陸出張所 / 北関東営業所 / 千葉出張所 / 神奈川出張所 / 関西営業所 / 中四国営業所 / 九州営業所 / 沖縄営業所

エア一断震住宅

株式会社 三 誠 AIR断震システム
http://www.airdانشin.jp/

究極の地震対策住宅 国土交通大臣認定取得 国住指第 2036号

①通常時
地震センサーが常にゆれを監視しています。

②地震発生時
地震センサーが一定以上の地震波を検出すると同時にエアータンクから空気が送られて家を浮かし、揺れを断ちます。

大地震が来ても大丈夫
揺れりの揺れを1/30に軽減。『エア一断震住宅』なら、毎日安心して暮らせます。

第17回 東京理科大学 ホームカミングデー

10月30日(日) 9:00公開

今年もホームカミングデーはオンライン開催となりました。特設サイトに築理会が参加します。

*詳細は同封のガイドブックをご確認ください。

企画①：最近の神楽坂まち歩き【ダイジェスト版】

神楽坂キャンパスを経験した世代と経験していない世代が、最近の神楽坂の写真を持ち寄り、神楽坂の変化、素晴らしいさや面白さについてディスカッションします。

※昨年度のホームカミングデーで好評だった「神楽坂まち歩き3部」をまとめて見やすくしたダイジェスト版です。

企画②：今の「金町」の魅力探訪

昨年度活動した神楽坂街歩きと合わせて、現在の工学部建築学科のある金町周辺をOBで散策します。金町を経験していない世代が、学生に聞いた金町スポットを街歩き、神楽坂と金町の違い、移転先でのリアルな魅力についてディスカッションします。

学生と卒業生交流会イベント 「先輩と語る2022」

11月26日(土) 15:00-17:00、オンライン開催

主催：建築学科

学生さんたちが建築学科を卒業した先輩たちに、気軽に仕事のことについて質問ができます。コロナ禍での職場や業界のことを先輩たちがリアルに答えます。フランクにおしゃべりができるイベントとして例年盛り上がりを見せていますので、是非ご参加ください。普段会社などでは聞けないような話が聞けるかもしれません。

先輩と語る2020、2021、SA forumの詳細は、SA forumのサイトをご覧ください。



表紙写真紹介



作品説明：「秋」 森の中で赤く色付き始めた秋の景色を切り取りました。公益財団法人 大学セミナーハウス 八王子 吉阪隆正氏設計。
塩島健太さん(建築学科4年 写真部)

大宮喜文氏ならびに寺本健一氏 受賞記念講演会

大宮喜文氏(理工学部教授)の日本建築学会賞(論文)、寺本健一氏(建築家)のベネチア・ビエンナーレ国際建築展金獅子賞受賞を記念し、記念の会を開催いたします。お二人とも本学理工学部建築学科出身です。各々の講演、山名善之・理工学部教授の進行による座談会に続き、ささやかな交流の場を開催します。

11月13日(日) 13:00-16:00

神楽坂校舎1号館大講堂

会費1000円

(感染状況により交流の場を中止する場合は無料です)申し込み方法はHPやメルマガでご案内します。

主催：野田建築会+築理会

協力：理工学部建築学科+工学部建築学科

築理会新年会

1月21日(土) 来年も築理会+野田建築会の合同開催の予定となっていますので、奮ってご参加ください。

築理会ホームページ

築理会ホームページを定期的に更新しています。築理会の活動や会員の皆様の情報をより一層発信しますので、ぜひご覧になってください。



新任退任教員

【2022年4月新任の先生】

野中俊弘 嘱託教授
足立壮太 嘱託助教(郷田研究室)
寺島康平 嘱託助教(長井研究室)
陳引力 嘱託助教(高橋研究室)
小島啓輔 嘱託補手(インターンシップ担当補手)
青山郷子 嘱託補手(山川研究室) 1月付

【2022年3月退任の先生】

砂川晴彦 嘱託補手(インターンシップ担当補手)
梅村吾希子 嘱託補手(山川研究室) 1月付

会費納入のお願い

築理会は皆さまの会費により活動しています。卒業生、在校生への多様な活動のために、会費の納入をお願いします。築理会やりぼんの活動などに対する寄付も受け付けています。

編集長：近藤 剛啓

編集委員：古池廣行、野田正治、飯山道久、荒井眞一郎、浦山千明、森清、伊藤学、高橋潤子、阿久津好太、熊谷一清、鈴木敦子、三浦博範、栢木まどか、渡邊杏奈、山岸隆、本山真一郎

編集後記：三浦博範

金町周辺の取材で金町を散策しましたが、駅前の再開発が徐々に進み、キャンパス移転から10年での街並みの変化に驚きました。薬学新校舎が去年着工し2024年に竣工しますが、金町と共に大学が発展していく姿が楽しみです。